

約10年ぶり。単年度、営業黒字が実現。ホスピタリティーの向上が奏功。

塩原カントリークラブの理事会が6月20日に開かれ、会社・塩原ゴルフクラブ側から、3月期（令和5年4月—令和6年3月）の運営状況の報告があった。席上、堀越三津夫社長から年間売上は3億5,852万円と前年より3,983万円の売上増となり、最終損益が約10年ぶりに黒字転換を果たしたことが明らかにされた。

年間入場者数をみると、4万5,188人と前年の4,199人の増で一人当たりの営業単価が前年比160円増の7,934円だった。これについて、昨年は例年に比べ台風の発生件数が少なく、冬季の降雪も少なめで、来場者数が目標の45,000人を突破したことをあげ、周辺ゴルフ場との価格競争の激化など厳しい状況にはあるが、年間目標入場者数を維持すべく環境整備を継続することが経営課題となる。

国体のゴルフ競技の開催を契機にコース整備に力を入れ、コースの改善などロコミが国体レガシーとして、好結果をもたらしてくれたという見方もある。国体以降、各種の公式競技会の開催も続き、カートのコース乗り入れ、カートナビの導入など経営努力も功を奏している。

地権者の御協力にも感謝

会社側では「この黒字化にはコース用地の土地所有者から、借地料大幅引き下げを認めていただいていることも大きく寄与している。これからも各方面からの御協力を忘れることなく励みたい」としている。理事会側からは、「早朝から社長、支配人が客の迎えに出て、バックを引き取ってくれているゴルフ場は見たことないというビジターの声も聞こえて来る」と、従業員こぞってのホスピタリティーがあつてのことと評価の声があがった。

月例会の競技ルールなどの変更を検討へ。3クラス制への移行も。 競技委員会。

月例競技会は現行、ハンデ15を基準にA、Bの2クラス制で開催されているが、メンバー数の増加などのせいもあって、とくにBクラスのキャンセル待ちが、毎月5組ほど出ているという。キャディーマスター室が、早朝スタート組を増やすなどして、不参加組が出ないように調整しているが、それも限界に近いという。

このため、クラブ側では3コースがあつて、それぞれからスタートが可能なことから、A、B、Cの3クラス制の可否について理事会に提案があつた。カートナビの導入により、ストローク戦のアテストを従来のカード方式のままにするのか、ナビでの入力で済ませるのかなど、ほかにも検討が必要な事項もあり、競技委員会で検討を進めることになった。

競技委員会ではメンバーのハンデごとの分布を調べ、3クラス制にする場合、どのハンデで区切れば、競技性を維持したまま区分けが出来るかどうか検討して結論を出すことにしている。



関東倶楽部対抗競技(男子)決勝。7位と大健闘。

2024年度の関東倶楽部対抗競技大会(男子)は6月11日(木)に静岡県・葛城ゴルフクラブで、42チームが参加して決勝大会が開催された。県予選2位で駒を進めた塩原カントリーは、301で7位と敢闘した。優勝は新千葉カントリー(294)、準優勝は那須小川ゴルフクラブ(296)、3位姉ヶ崎カントリー倶楽部(298)、本県から共に決勝に進出した矢板カントリークラブは17位、日光カンツリークラブは38位だった。



6年ぶりにシニア選手権。関口さんが栄冠。

2024年シニア選手権は6月23日、16人が参加して開かれた。シニア選手権はメンバーの高齢化や新型コロナの流行もあって参加者が減って開催されなくなり、6年ぶりの開催が実現した。優勝スコアは3人が82の同スコアで並び、規定により関口健一さんが優勝、2位は渡辺正巳さん、3位は前田智さんだった。

シニア選手権では、競技性を持たせて参加者を募るため、1-3位までをスクラッチ戦、それ以外をハンデ戦として集計することにして実施、ハンデ戦の優勝は佐々木啓之さん、準優勝は八木沢悟さん、3位が鈴木英利さんだった。





クラブチャンピオンは河本さん。

2024年度のクラブ選手権の決勝は6月16日に決勝が行われた。河本泰司さんが27ホール目1アップで相馬義孝さんをくだし、今年度のメダリストとなり、クラブチャンピオンに輝いた。今年度の大会参加者は16人だった。



EV自動車用充電器の稼働が順調。

マイカーのEV化が進んで、EV車のゴルファーも増えているが、塩原カントリークラブでは、今春からEV車用の充電装置が備えられ、利用者から「エネルギー切れを気にしないでプレーに専念出来る」と好評だ。充電装置は駐車場の西南隅に2台分が確保されている。

ゴルフ場が提供したスペースに、電力供給会社が充電設備などの初期費用を負担して設置したうえ、維持、管理費用も負担している。電気料は現在のところ、塩原カントリークラブが負担しゴルファーへのサービスとなっている。利用者は週に数台だが、今後増えることが予想され年内にはさらに2台分が増設される予定。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ — ☆ 南コース 8 番 ☆



やや左ドックのロングホール。

1打目はフェアウェイ左側に打っていきたい。

2打目は残り100から130ヤード付近左右にバンカーが有るので手前か越えるかの距離感が難しい。

3打目はやや打ち下ろしになるので手前目に狙いたい。

グリーンは手前から転がるので奥には外したくない。

このホールはフェアウェイに松の木がありグリーン周辺にバンカーが有るのでショットの距離感と方向性が重要になります！

むかし、天野勝というプロゴルファーがいた。一九四二(昭和一七)年、広島県で生まれ、広島の大学を卒業後、上京して実業団の卓球選手として、東京都大会の個人戦で優勝するなどの活躍をした。サラリーマン生活にあきたらなくなった天野は、すっぱりと会社をやめ、プロゴルフの道に転進した。本人はあるテレビ局のアナウンサーに、「職を探しに職業安定所に行った帰り、たまたま、ゴルフ練習場に寄り、初めてクラブを握ったのがきっかけでこの世界に入った」と言い残している。

江場友幸が知っている話とは少し違うが、この時、天野は二十六歳だった。四か月でハンディは4になって、練習場のインストラクターをしながらプロテストを目指した。戦績こそ目立たないが、柔らかさと力が調和したスイングにはプロも一目を置いた。そして、五年目に遅咲きながらプロテストに合格した。

まだレギュラートーナメントの出場権を持たない頃、天野は栃木県内で開催された準レギュラーの試合に参戦。そこで若いプロが使っていたクラブを試してみ、「これを直した人に、おれのクラブを見てもらいたい」と、若いプロの案内でやって来た。クラブの修理を終えると、工房の窓辺に立てかけてあったゴルフバックを見て、「これは何ですか」。江場が「私が作っているクラブのセットだ」と答えると、「明日の試合で使わせてください」と言う。江場の「いいよ」という返事を聞く前に、天野は自分のバックの中のクラブとエバモデル入れ替えてしまっていた。

天野はそれから二試合ほどエバモデルを使った。そして、「自分にマッチしています。セットを作ってくれませんか」という。何度か会って、細かい注文を聞くにつけ、若いプロと切磋琢磨する精神的なしんどさを江場に漏らした。

江場はそんな天野に、高校時代のゴルフの恩師・佐々木先生から受けた、コースでの厳しい練習の模様を再現するように話してやった。先生はどのホールでも、研修生の先頭を切って歩く。生徒がうまくフェアウエーを捉えたボールは、蹴るか手で投げるかしてラフに出してしまう。あるいはまた、ボールを靴で踏んづけて、よほど近づいてからでないと見えなくしてしまう。

バンカーが近ければ、足で蹴り込んでしまう。時には、ここでも踏んづけてわざと目玉にした。そんなことは、日常茶飯事で、そうして「試合ではどんな災いが待っているかわからない。それを克服することこそ本当の実力。それを身につけなさい。バンカーで前に出せないなら、出せる所へ出して次を考えよ」と教えてくれたと伝えた。

クラブが仕上がったと連絡すると、天野はバック持参で急いで取りに来た。「自分の金でクラブセット買うのはこれが初めてなのです」。武士だとすれば、借りた刀か、竹光で果たし合いに臨むようなものだったではないか。あらかじめ、「ちゃんと代金はいただくよ。その代わり実費だけでいいよ」と言っておいたから、天野はきっちり代金を置いて帰った。

しばらく音沙汰もなかったが、ある日の午後、古くからの客二人を応対している時だった。突然、ドアが開いた。プロの天野であることに気づいた客の一人が声をかける間も取らせず、天野が客の頭越しに、江場に握手を求めてきた。

「ありがとうございました。今日の東京オープンで勝ちました。来年のレギュラーのシード権もとれました。それもこれも、エバクラブのおかげです」



天野が会場からわざわざお礼に駆けつけてくれたのだ。江場に見れば、使用クラブを作ったからこそ味わえる達成感と充実感にひたれる瞬間だった。遅咲きの天野が四十八歳の秋だった。

翌年はシード落ちを食って、一年空けてシニア入りした。その年は初戦から二連勝、一試合おいて、北海道の大会で三勝目の夜、天野がエバゴルフ工房にやって来た。「優勝してこんなことは言いにくいのですが、(国内大手メーカーから)用具契約をもらうことになりました。今までありがとうございました」。そして、言葉を継いだ。「でも、調整と修理は今まで通りお願いします」。北海道遠征は東京から福島・須賀川まで車を走らせ、福島空港から飛び、同空港を経て帰京する途中に寄ったという。天野がわざわざ須賀川経由を選んだのは、江場にそれを報告して、わびを入れるために、この経路を選んだのだのかもしれない。その心遣いがうれしかった。しかし、大手用具会社が次々と客を囲い込んで行くその手法に寂しさも感じた。

天野はレギュラーツアーで、ひょうひょうとした雰囲気をかもし中堅プレーヤーとして名を売った。関東オープンでジャンボ・尾崎に逆転勝ちしたほか、ツアー3勝の実績も残したが、なんとと言ってもシニアになってからの波乱の方が興味深い。

一九九二(平成四)年のシニア初戦で優勝、以来、開幕6試合で4勝をあげて賞金王に輝くなど、計7勝を重ねた。折からのバブル崩壊でシニアの試合数が減ったのを機にUSシニアツアーの「クオリファイイング・スクール」を受験してトップ合格、アメリカのシニアツアーに参戦した。小柄ながら飛距離が出たため、「違反ボールを使っているのではないか」と疑われたこともあった。妻をキャディーとして帯同、三年間にわたっておしどりでアメリカを転戦した。

帰国してからも、シニアツアーに出ていたが、二〇〇〇年代の初めに、肝臓がん、それも末期と診断されていた。それでも、がんと闘いながら試合に挑み続けていたが、二〇〇六(平成一八)年に帰らぬ人となった。江場にとっては律儀な思い出深いプロだったが、プロの世界では、神経質過ぎるという評判もあった。ちょっとしたミスをそのまま引きずり、その分はキャディーに向けられることがあった。「ショットの時は、こっち立って」「クラブはこっちから、こう渡して」。ハウスキャディーの中には、腰を引く人もいた。

(つづく)

編集後記

営業損益が約10年ぶりに黒字に転換した。少なからずクラブの運営に関わらせてもらった者としてうれしい。「あの民事再生騒動を乗り越えて」と溜飲を下げる。救援の手を差し延べてくれたスポンサー、地代の引き下げで協力してくれた地主の方々…。それにゴルフクラブ従業員の我慢と努力があったからこそと、拍手を贈りたい。コースへのカート乗り入れ、ナビの導入でスロープレーへの苦情が減っているという。アメリカの話だが、「プレーが早くなるならゴルフ代が高くなってもかまわない」というゴルファーが多いという調査結果あるという。カート乗り入れも黒字転換に寄与しているのかも知れない。

井上安正